

多摩地域におけるめかいづくりの 継承・活用に係わる基礎研究(その3)

篠田真理子(人間社会学部人間環境学科)
谷本 寿男(人間社会学部国際社会学科)
定松 文 (人間社会学部国際社会学科)
漆畑 智靖(人間社会学部国際社会学科)
宮内 泰之(人間社会学部人間環境学科)
荒又 美陽(人間社会学部国際社会学科)
白石 昌吾(多摩市民、多摩自由大学副理事長)
浅井 民雄(多摩市民、多摩市民環境会議副会長)
菊池富士江(多摩市民、めかいづくり実践者)
大泉 麻耶(三鷹市民)
遠藤 由子(人間社会学部国際社会学科4年)

A Study on the Preservation of Traditional Mekai Production Techniques in the Tama Area (Part 3)

SHINODA Mariko, TANIMOTO Hisao, SADAMATSU Aya,
URUSHIBATA Tomoyasu, MIYAUCHI Yasuyuki,
ARAMATA Miyo, SHIRAIISHI Shougo, ASAI Tamio,
KIKUCHI Fujie, OIZUMI Maya, ENDO Yoshiko

Abstract

This is the third year study report to propose a way of preserving the production techniques of Mekai baskets, a major income-generating activity among small-scale famers in the Tama-Area since the Edo Era.

The major identified outputs in this study are: 1) some details of expansion of Mekai baskets production in Tama Area via analyzing previous studies and 2) some details of the way of succession of the production techniques of Mekai baskets by the people and the community after the Tama New Town Development.

In addition, a case of *Shinodake* baskets work at Matsumoto in Nagano Prefecture is also attached.

はじめに

本研究は、多摩地域の伝統的な手仕事の一つであっためかいづくりに焦点をあて、その歴史的な位置づけを調査するとともに、技術の継承可能性を探ることを目的としている。2009年の初年度の研究では、先行研究の収集・分析を通して歴史・文化的ならびに技術面のレビューをおこなうとともに、新たな試みとして、めかいづくりの原料のシノダケの確保という視点から、この地域で残された里山の維持・保全策についての基礎調査をおこなった。さらに、明治以降の近代資本主義における産業としてのめかいづくりの位置づけと世帯の生き残り戦略として女性の役割、地域における聞き取り調査を通じためかいづくりの担い手によるめかいづくりの意義づけの抽出、調査者の視点から里山保全における意味づけを考察した。

2010年度には、多摩地域においてめかいの記憶を有する人々への聞き取り、岩手県鳥越と宮城県岩出山の二ヶ所の竹細工産地での聞き取りを行い、多摩地域におけるめかいの地域的特性の分析を試みた。

本年度は、めかいの継承可能性という点に焦点を当て、まず、多摩ニュータウン開発以前のめかいの発展・展開について先行研究をもとにレビューをおこない、次いで、聞き取り調査にもとづき、ニュータウン開発以降、すなわち多摩のめかいが産業としては衰退した後、現在までいかに継承されてきたのかを明らかにした。また、近年、産業としては衰退してしまった長野県松本における竹細工の現状と、その継承のための努力についての調査結果を参考資料として付した。

本研究では、めかいづくりに使用されるシノダケ(一部では、正式和名のアズマネザサと表記)を原料と記し、シノダケから加工されるヒネなどを材料と示すといった区分を行った。めかいづくりの行われてきた行政区としての八王子・多摩・稲城・町田を多摩地域、また雑木林を里山という言葉で表記することとした。

なお、本研究は、2011年度恵泉女学園大学園芸文化研究所からの研究助成

によって行われたことを付記する¹。

第一章 多摩ニュータウン開発とめかいコミュニティの変容

多摩のめかいの衰退の背後に、多摩ニュータウン開発の影響があったことは、昨年度の報告書²においても触れてきた。実際のところ、これまでの調査におけるめかい伝承者への聞き取りの過程で、多摩ニュータウンの領域を越えたコミュニティの広がりを感じるが多々あった。多摩ニュータウン建設に伴い、そのコミュニティが分断されたということである。ここでは、その聞き取り結果にも触れつつ、既存研究の関連項目を整理して、開発がめかいコミュニティの領域に与えた変化について記しておきたい。

1. めかい生産の広がりとその中心

めかいについて詳細な調査を行った坪郷英彦は、その最も古い記録を天保14年(1843年)の現在の八王子市南部の宇津貫村周辺のものとし、同時期に養蚕用のふるいや小筥の需要が高まったことが背景にあるという考えを示している³。その技術は徐々に尾根沿いを東に伝播し、他の方角には向かわなかった。坪郷は、「北と南をそれぞれ多摩川、境川に挟まれた多摩丘陵」において、「経済の中心地から遠い、丘陵の尾根沿いに技術が東に伝わった」と見ている⁴。また、尾根沿いを走る道路は、由井村宇津貫のそばで、南北に走る街道と鉄道にぶつかっており、それより西側とは交流が少なかったことが推測される。

明治20年に、めかいの仲買商人と製造者による組合は、生産地を二つに分割し、東組と西組で相互に買い入れをしないことを決めている⁵。記録が残っている西組には、八王子、同八日町、宇津貫村との地名が記載されている。それより東は東組ということになる。明治20年以降、めかいは二つの領域をもって生産されたということである。

大正5年のデータでは、南多摩郡のめかい従事者を見ると、宇津貫を中心とする由井村でのめかい生産戸数は45戸、由木村380戸、多摩村480戸、鶴川村45戸、七生村32戸となっている⁶。八王子町のデータがないのは、この町の都市化が進む中で、生産が行われなくなったことを示している。こうして、

めかい生産の中心地は、由木村、多摩村となった。現在の日野市や町田市の隣接地域にも生産は広がっており、大正期までには、めかいは東組のものとなったといえる。

大正元年ごろ、南多摩郡でのめかい生産戸数は351戸との記録がある⁷。大正5年には、982戸となっている⁸。データの取り方などの違いがあるため、単純な比較はできないが、大正期にこの産業が大きく発展したと考えるひとつの証左となるだろう。多摩村のデータで見ると、大正6年の時点で、全戸数672戸のうち、農業を行っているのが568戸である⁹。大正5年のデータでは、めかいを製造していたのは480戸であり¹⁰、1年間のうちにあまり変化がないことを前提とするなら、農家の85%がめかい生産を行っていたことになる。その意味で、めかいは由木と多摩における主要産業のひとつでもあった。

2. 落合周辺地区の優越と材料の入手

めかいの生産は、多摩村では落合と乞田を中心としていた¹¹。落合や乞田は人口も多いが、平均耕作面積も大きかった地区である¹²。めかいは、農家の中でも耕作面積が比較的小さく、山林地主のように木炭を作るなどの副業が困難な人々によって行われていたとされるが、落合と乞田が他の地域よりも貧しかったかどうかは明らかではない。むしろ、連光寺や関戸では、「かわらの砂利ふるいや橋のかけ替えというようなオトコシ(男衆)の金取りの仕事がほかにあった」¹³という見解が的を射ているのではないか。いずれにせよ、まずは多摩村の中でも、めかいの生産状況は一様ではなかったといえる。

落合では、由木から嫁を迎え、めかいの担い手としての役割を期待したという証言が複数ある¹⁴。実際の距離から見ても、多摩の西端である落合は他の地区よりも由木村の東端の東中野に近く、乞田を含めた落合が生産の中心地となっていた状況を見て取ることができる。さらに、由木や落合は、めかいの中でも注文頻度の高いオオヒラ、チュウヒラを多く生産していた¹⁵との記録もあり、技術的な近さも二つの地域の心理的な距離に影響を与えたと考えられる。

原料のシノダケは近隣の山から伐ってくるが、収集された証言によれば、落合では山林地主との契約、あるいは雨の夜に盗みどりしたという。他方

で、同じ時期の証言で、東寺方の伝承者は、どこから伐っても良かったといっている¹⁶。それは、その証言者の家と山林地主との関係ということも考えられるが、落合という生産の中心地では、原料を奪い合う状況が生まれ、提供する地主との関係もより厳しいものにならざるを得なかったとも推測される。

ふちまきのためのシノダケは、真光寺から黒川のあたりで採った、あるいは買ったという証言もある¹⁷。ふちまきのような特別な用途ではなくても、足りなくなれば遠くまで採りに行くか、買うかであった。今までの聞き取り調査では、落合の小泉氏が、宇津貫に近い御殿峠まで採りに行ったと話していた。和田地区では、鶴川村・王禅寺からシノダケを買っていた¹⁸。由木にも問屋があり¹⁹、また戦前には東寺方の商店でも販売していた²⁰。小野路の永井氏は、麻生・柿生に買いに出かけたと話していた。めかい生産地域に近いが、生産に熱心ではなかった地域からシノダケを得ていたことが見て取れる。

3. 仲買、鍛冶屋

めかいの生産自体は、家内工業で行われていたことが明らかになっている。他方で、めかいは自家用ではなく、あくまで現金収入を得るための産業であったため、生産者と消費者を結ぶ仲買が重要な役割を果たした。多摩市の仲買は、明治29年には落合に多く、生糸などと併せてめかいを扱っていた²¹。近年まで落合で仲買をしていた小泉家では、小野路、多摩、由木、鶴川から仕入れをしており、めかいの中心地域全体と取引をしている²²。小泉家は、めかいの生産指導も行ったとの記録があり、仲買がめかいコミュニティを作っていたと考えることができる²³。

めかいの道具、特にめかい包丁については、最盛期には近所の金物屋で手に入るものであった。それを製造する鍛冶屋としては、鎌倉街道沿いの池田鍛冶屋についての言及が見られる²⁴。本研究での聞き取りでは、小野路の永井氏が「乞田の鍛冶屋」と表現していたところでもあるだろう。永井氏は、町田に出店していた乞田鍛冶屋も利用したことがあり、長く鍛冶屋を続けていた高幡不動の鍛冶屋²⁵にも行っていたという。現存する府中の「かじ福」は、今までの調査の範囲では旧住民の語りの中には出てこない。それは、多摩丘

陵のふもとで多摩川の南側の日野市三沢に対して、府中は多摩川の北側であり、めかい生産地からは心理的に遠かったからではないか。

4. 多摩ニュータウン開発とめかい生産

多摩ニュータウン開発は、めかい生産の中心であった乞田・落合地区から始まった。めかい生産が多摩ニュータウン開発によって衰退するのは、まさにそのためではないか。さらに、昭和39年に、激論の末、由木村が多摩町ではなく八王子市に編入されたことも、生産地の分断に寄与したと考えられる。小野路や日野とのつながりも、間に多摩ニュータウンが建設されることによって分断される。多摩ニュータウン開発は、こうして、めかい生産において存在していたコミュニティの広がりを変容させたといえる。

第二章 多摩ニュータウン建設後のめかいの継承

先行研究によって、めかい編みは、プラスチックなどの代替品の普及とともに、多摩ニュータウン開発によって衰退したことが明らかにされてきた²⁶。しかしめかい編みの技術は、高度成長期に失われたわけではない。むしろ、この3か年間の調査を通じて、めかいはごく近年までは多摩地域の「伝統」として実践されていたのであり、伝承の危機は今まさに起こっている問題であることが見えてきた。ここでは、旧住民による楽しみとしてのめかいの実践と新住民の主婦層による継承について記録しておきたい。

1. 旧住民の余暇活動

多摩のめかい編みの伝承活動を活発に行った人物に、小野路の萩生田長吉氏がいる。同氏は本研究会メンバーである浅井民雄氏が編集に携わった『多摩のめかい』²⁷において、めかいの用語、種類、編み方などについて詳細な記録を残している。後述する豊ヶ丘児童館でのめかい教室についても、初心者のみならず講師クラスの指導に当たってきた。

萩生田氏がめかいの保存に携わった経緯については明らかではないが、『多摩のめかい』の記述によれば、多摩市が主体となった保存活動のほうが先にあり、触発されたようである。「私も30年のブランクがあった。どうかなど

思って始めたのが6年前である。(…) 今では民芸品として皆様に一応の評価を頂けるようなものを作る事ができるようになった。しかしまだ研究と工夫に努力しなければならない余地のあることを痛感し、(…) めかい作りの伝統を生かした篠工品の技術の保存に努めたいと思っている」²⁸。ここには、伝えなければという使命感よりはむしろ、「研究と工夫」を重ね、楽しみとして自身の技術を向上させようとする意志が読み取れる。

実際のところ、萩生田氏は旧住民のコミュニケーションの手段としても、意識的にめかいを使った形跡がある。1988年に「長寿会」という小野路の住民交流会が開かれており、そこでは余興としてめかいが行われた。記録した写真に残っているのは、以前からめかいを編んできた女性たちである(写真1)。彼女たちの表情からは、趣味としての手作業の喜びが伝わってくる。それはもはや仕事ではなく、仲間と身近な材料でかごやざるを作る楽しみなのである。萩生田氏のように交流の媒体としてのめかいをとらえる志向は、他の住民にも確実に共有されていたようである。



写真1 小野路「長寿会」でめかいを編む女性たち

余暇活動のなかでめかいを行っていた旧住民は、萩生田氏だけではない。2009年に聞き取りを行った東寺方の伊野澄氏も、大人になってから母親の指導を受けながらめかいを行い、趣味として作り続けていた。子供のころには原料の篠竹取りを手伝っただけであったが、大人になってから全工程ができるようになり、新住民を主体とする桜ヶ丘公園の雑木林ボランティアのメンバーにそれを伝えた。



写真 2 伊野氏のめかい実践(2011年逝去)

堀之内のK氏も、2009年に訪問した際、子どものころはふちまきの担当だったとしながら、すべての工程を里山農業クラブのメンバーに教えていた。作業を身近で見ながら暮らしていた旧住民は、望めば全部の工程を行い、周囲に示すことができたのである²⁹。

旧住民のなかには農家の副業であった時代の苦労を思い、めかいに対してアンビヴァレンスを覚えていた人もあるようである。新住民が多摩市の祭りの中でめかい作品を展示すると、「いい思い出ねえけど、でもあのときにはもらったお金で正月の下駄とか着物だとか作ったんだよな」としげしげ見る旧住民女性もいたという³⁰。他方、小野路や東寺方の旧住民は必ずしも苦い思い出を持っていなかったようである。男性はめかいを編む作業を担ったのではないこと、落合や乞田のようなめかい生産の中心地ではなかったこと、K氏以外は多摩ニュータウン区域外の住民であることが関与している可能性があるが、より詳細な検討が必要である。

以上のように、めかい編みの技術は多摩ニュータウン開発とともに失われたわけではなかった。しかし、産業として実践されなくなった現在、以前のめかいの記憶を残す人々はほんとうに一握りとなった。旧住民によるめかいの実践は、今まさに途絶える危機にある。

2. 新住民の主婦による活動の展開

多摩ニュータウン開発後、めかいを実践したのは旧住民だけではない。現在までほとんど記録されてこなかったのは、新住民によるめかい編みの実践である。それは多摩ニュータウン初期入居のころに多摩市の主導で行われ

た「めかい教室」をきっかけとしている。多摩市社会教育課は、宮森氏を中心として³¹、旧住民と新住民の交流の場を設けることを検討し、その手段としてめかい教室を行うこととした。講師として招かれたのは、落合の小泉ソノ氏である。

小泉氏は、その後、永山児童館に招かれ、1週間か2週間に一度、めかい編みの教室を始めた³²。



写真 3 永山児童館で指導する小泉氏

矢滝三千子氏は、永山児童館でめかいに出会う。昭和47年(1972年)12月に多摩ニュータウンに住み始めた矢滝氏は、子どもが4-5歳になると、児童館で子どもを遊ばせながらめかいを習い始めた。

そのうち、永山児童館で長く習っていたメンバーが、「サークルめかい³³」を立ち上げ、作品を作って展示会などを行うとともに、新規の参加者に教えるようになった。府中の「かじ福」で包丁を買い求めると、道具を眠らせないためにも熱心に活動を行った。夏休み以外の1年をワンシーズンとして、シーズンに10人程度が参加していたという。昭和55年(1980年)には、午後に学校から帰ってくる3年生以上の小中学生にめかいを教えるようになり、昭和61年(1986年)には大人と子どもの作品展をグリナード永山で行った³⁴。子どもがつかう包丁は、児童館が用意した。

矢滝氏は、次第に児童館を離れ、ひろくめかい編みに関する活動を行うようになった。めかい仲間の3-4人に助手を依頼し、多摩センターのイトーヨーカ堂やグリーンライブセンター、東京都公園協会などでもめかいを伝える活動を行った。さらには京王百貨店にも依頼され、展示販売を行ったこともある。

このように永山で活動が展開する一方、多摩ニュータウン開発の進展とともに豊ヶ丘地区も完成して、児童館が開設された。永山児童館の職員が豊ヶ丘児童館に異動となり、豊ヶ丘でもめかい教室が開かれることとなった。多摩市には産物がないので、めかいは絶やさないようにしようという意識が館長の城ノ内氏にあったようである。そこで活動を続けることになったのが、本研究会メンバーでもある菊池富士江氏である。

菊池氏は、多摩ニュータウンに住む前から、テレビ番組を通じて多摩のめかい活動についての知識を持っていた。昭和56年（1981年）3月に多摩市に住み始め、5月には多摩センターの祭りで永山のメンバーによるめかい展示を見ることになる。子どものころに使っていたざるを思い出して懐かしさを覚えた菊池氏は、昭和57年2月、豊ヶ丘児童館で「めかい講習会」があるというのを広報で見て、さっそく参加することにした³⁵。講師は小野路の萩生田長吉氏であった³⁶。

そのときすでに豊ヶ丘児童館には「めかい同好会」があり、萩生田氏とともに指導にもあたっていた。めかいの魅力に取りつかれた菊池氏は、昭和57年の秋には指導を手伝う側になり、その後25年間、豊ヶ丘児童館でのめかい講習を担当することとなった。菊池氏と先輩の同好会メンバーは、町田の小学校やイトーヨーカ堂のふれあい広場での体験講座なども行った。多摩市の小学校の3-4年生に地域の勉強として教えるようになったのは、菊池氏が児童館のメイン講師となってからであったという³⁷。

豊ヶ丘の「めかい同好会」のメンバーは、永山の「サークルめかい」とは重なり合っておらず、あくまでその児童館を利用する主婦層で形成されていた。しかし、5月の多摩センターのグリーンフェスティバルや代々木公園での「東京多摩ふるさと祭り」では、永山と豊ヶ丘のグループが協力して実演販売を行った(写真4)。祭りへの参加は、10年以上も続いたという。また、二つのグループが山梨県勝沼の竹細工を一緒に見に行ったこともあった。



写真 4 当時の白井多摩市長と矢滝氏(右から4番目)、菊池氏(右端)

児童館を中心とする主婦のめかい活動を農家の副業と区別する点として、矢滝氏も菊池氏も、「私たちは全工程を一人でする」という点を挙げる。分業体制が出来上がっていた時代と異なり、主に男性が行っていた力作業であるふちまきや筋入れも女性ができる限りで行わなければならないことから、伝統的な形ではなく、それぞれにとって可能な形に変化させた部分がある。

豊ヶ丘児童館の主婦がめかいを教えられるようになると、萩生田氏は、児童館ではなく、自宅で同好会メンバーや菊池氏への講師を続けたが、同好会メンバーたちがざるだけでなく、花入れや壁掛けなど、団地の生活に合わせた小物を作り始めると、それに触発され、自身も新しいものを作るようになった。めかいは、新住民の生活と接触することによって、日常使いの台所用品から生活にうるおいをもたらすものへと変化する可能性を見せ始めた。

めかいの魅力は、矢滝氏、菊池氏双方にとって、原料のシノダケが周りにいくらかでも生えていて、「すべて自分でできる」ということだったという。

「もう即自分が体を動かせば竹が手に入って、自分でできるってことでしょね。最初から最後まで自分で仕上げられる。汚れようが、手を切ろうが。そういうことじゃないかな」(矢滝氏)。「手芸用品の材料は買ったんですけど、このめかいというのは、山を歩いて竹を切って、それを材料にするというのがすごい魅力的でした。(…)買った材料だったらいつでもできるっていう感じがあったんですね。(…)木と違って、竹は毎年生えてきてかえって邪魔者扱いされるぐらいだから」(菊池氏)。

シノダケ群生地に入るのには、多少の危険はあった。「晴れている日でも薄暗い淋しい細い道を木漏れ日を目指して自転車をこぎました」(菊池氏)。

「(メンバーが) 地蜂の巣を踏んで頭を刺された時もありました。(…) 竹を取りに行くのは、大体10月に、もう蛇いなくなったわねって」(矢滝氏)。めかいを作る作業も同様である。「私も指を切ったり。あれは包丁で怪我はしないんです。竹でけがをするんですね、はねてきて。(…) 外科に行ったら、『一か月食事作れませんって言うていられるからだろう』とか先生に言われたこともあります」(矢滝氏)。

それでも、原料が身近にあり、全部手作業で作れるということは、多摩ニュータウンの主婦たちをひきつけた。逆に、その条件がなくなれば、めかいの魅力は薄れていく。現在、矢滝氏も菊池氏も、めかいを教える活動は休止している。その理由の最初に挙がるのは、原料のシノダケが採れなくなったということである。

「(小野路の) 材料の篠竹を取りに行ったところが、造成されたことです。造成が始まっていたんです」(菊池氏)。「(市場の東側のあたりで竹を採っていたが)尾根幹線ができてから、どんどん竹が汚れたので。拭いたり、洗ったり。(…) だからより良い竹を求めて、私は箱根の竹もいただきました」(矢滝氏)。

多摩ニュータウン開発は、1970-80年代で終わったのではない。開発事業としては2005年まで続いた。その間には多くの変化があり、里山のそばに幹線道路ができ、土地の造成が進んだ。シノダケの群生地がなくなっていくことはもちろんのこと、当初は気にならない程度であった汚染も、口にくわえる作業のあるめかいの材料づくりに支障をきたす。

矢滝氏も菊池氏も、今も自身では手元にある材料を使って作っているものの、多くの人々に教えるほど原料のシノダケはなくなっているという。両氏にとってめかいが本来もっていた魅力は、現在は失われつつある。

冒頭で述べたように、旧住民、新住民双方において、めかい作りはごく最近まで継続していた。しかし、現在は本当の意味で危機的な状況にある。めかいを身近に見ていた旧住民は高齢化し、多摩ニュータウン初期にめかいを習った層も伝承活動を休止している。

かろうじて続いているのは、八王子のグループのみである。比較で言うなら、このグループは「材料には困らない」と言うており、技術よりはむしろ原

料の確保こそが存続の条件であることが見えてくる。他方、多摩地域には放置された里山も少なくなく、付着する煤塵などの汚染の問題がなければ、原料のシノダケを採取し、材料のヒネを提供することは可能なはずである。永山児童館でめかいを習っていた当時の子供たちは、40歳前後となっている。めかいの技術を持つ新住民と、かつて習っていた経験がある人々をいかに結び付けることができるかがめかい存続の鍵となるのではないだろうか。

注

- 1 なお、これまでの三カ年間の研究をまとめて、別途、総合報告書を刊行した。
- 2 谷本寿男他 2011、p.50-102。
- 3 坪郷英彦 1999、p. 54。
- 4 同上。
- 5 多摩市史編集委員会a 1996、p. 11。
- 6 多摩市史編集委員会a 1996、p. 13。
- 7 坪郷英彦 1999、p. 53。
- 8 多摩市史編集委員会a 1996、p.13。
- 9 多摩市史編集委員会b 1999、p.367。
- 10 多摩市史編集委員会b 1999、p.374。
- 11 松田操・近藤茂 1990、p.72。
- 12 多摩市史編集委員会 1996c、pp.707-708。
- 13 松田操・近藤茂 1990、p.72。
- 14 多摩市史編集委員会 1996a p.16、p.21。
- 15 松田・近藤は、「地域的に見ると、鶴川や小野路ではジョウメズのような上物を、由木のヤソ入りではチュウヒラを、八王子ではシキザル、落合のあたりではザクモノと呼ばれるチュウヒラ、オオヒラを中心に作っていた」と書いている(p. 82)。また、注文頻度の高いのは、オオヒラ、チュウヒラ、チャシキ、ヒラダイ(尺二、尺三)であったという(多摩市史編集委員会 1996a、p. 92)。
- 16 多摩市史編集委員会 1996a pp.15-26。
- 17 同上 p. 15。

- 18 同上 p. 25。
- 19 同上 p. 18。
- 20 同上 p. 26。
- 21 同上 p. 12。
- 22 同上 p. 21。
- 23 出荷先は、東京中心部、神奈川県、埼玉県と広範囲にわたっており、多摩地域とのつながりは薄い。
- 24 同上 p. 15、p. 23。
- 25 日野市三沢の露木鍛冶工場とみられる。バルテノン多摩歴史ミュージアム 2009。
- 26 坪郷英彦 1999 pp. 51-60。
- 27 萩生田長吉 1977。
- 28 同上 p. 3。
- 29 小野路の永井氏もまた私たちが訪れた際に「見よう見まねで」ひねづくりや編みの作業をみせてくれた。副業として行われていた時には、ふちまきや筋入れのみが彼の仕事であり、ひねを作ったのは初めてだったという。小野路の「長寿会」に集まっていた女性の一人は、私たちが2010年に話を聞いた永井氏のパートナーであり、写真の提供は永井氏による。
- 30 矢滝氏へのインタビューによる。
- 31 多摩市史編集委員会 1996『多摩市の民俗（メカイ<目籠>関係資料）』多摩市 p.15、萩生田長吉『多摩のめかい』にも記載がある。
- 32 以降は、2011年4月28日に菊池富士江氏、2012年2月23日に矢滝三千子氏に行ったインタビューの内容から書き起こした。当時の児童館の記録は、多摩市の図書館には残っていない。
- 33 矢滝氏によると、編む作業を「めかい」、編んだかごを「めかご」と自然に呼び習わしていたとのこと。
- 34 参加する子どもは、必ずしも「サークルめかい」のメンバーの子どもとは限らず、また男の子もいたという。
- 35 めかいの講習に気付いたのは、知り合いのいない町で、毎月くる広報を見ては講座を受けていたためである。自然食をすすめる「家族の健康を守る会」などもあ

- り、新住民の主婦の交流の場を市が積極的に提供していたことを読み取れる。
- 36 菊池氏によると、小泉ソノ氏と萩生田長吉氏は作るものが異なっており、小泉氏のほうが繊細できれいなめかい、萩生田氏のほうが丈夫なめかいを作ったため、伝承された形も少し異なっているという。
- 37 ここにも、めかいの中心地であった多摩市よりも町田市のほうがめかいを忌避感なく受け入れていたことが見て取れる。

参考文献

- 谷本寿男他 2010 「多摩地域におけるめかい作りの継承・活用に関わる基礎研究(その1)『園芸文化』7 pp. 62-102
- 谷本寿男他 2011 「多摩地域におけるめかい作りの継承・活用に関わる基礎研究(その2)『園芸文化』8 pp. 50-102
- 多摩市史編集委員会1996a『多摩市の民俗(メカイ<目籠>関係資料)』多摩市
- 多摩市史編集委員会1999b『多摩市史 通史編二 近現代』多摩市
- 多摩市史編集委員会1996c『多摩市史 資料編三 近代』多摩市
- 坪郷英彦1999「在来技術の成立要因の分析—多摩丘陵における編組技術と自然・社会環境の関係性」『デザイン学研究』45-5、pp. 51-60
- 松田操・近藤茂1990「メケエつくり」(『パルテノン多摩ミュージアムライブラリー 雑木林と人々のくらし』多摩市文化振興財団pp.71-115)
- パルテノン多摩歴史ミュージアム2009『企画展 鍛冶屋のあゆんだ幕末・明治—乞田鍛冶からひょうたん鍛冶へ』パルテノン多摩
- 萩生田長吉1977『多摩のめかい』(私家版)

長野県松本調査

松本の竹細工について2011年8月5日－6日に調査を行った。

松本市のみすず細工は細い竹の一種であるスズタケを用いる。スズタケは広義のシノダケ(細い竹の総称)であり、多摩のめかいに用いるアズマネザサと共通性がある。2010年に行った岩手県鳥越の竹細工(スズタケ細工)調査の際、長野でもスズタケ細工を生産していたが、いまは途絶えている、という話であった。松本のみすず細工がそれに該当する。松本のみすず細工を調査研究している小林ちえみ氏のブログにより、職業としてみすず細工を作っていた最後の製作者が2009年に亡くなっていること、一方で松本市では、地域の名産品としての復活を図っていることがわかった。

今回は、松本市で「市民記者」としてみすず細工に関心を持って調べたことをブログ上で発表しておられる小林ちえみ氏の協力によって、松本のみすず細工について調査した。

1. みすず細工とは

みすず細工は篤竹(スズタケ)という細い竹を使うことからこの名で呼ばれている。長野県松本地方で明治20年ごろに最盛期を迎え、一時は輸出も行われていた。近年まで製作者がおり、販売も行われていたが、現在は専業で生産する職人が途絶えている。みすず細工で使う材料(ヒゴ)は、内側の肉をそいで作る。編み方は網代編みである。

2. みすず細工が展示されている場所

現在、製品としてみすず細工を販売しているところはない。しかし、かつて作られたみすず細工は市内の各所に展示されている。

1) 松本市内のはかり博物館

はかり博物館内にある旧三松屋蔵屋敷では、民芸収集品の一つとしてみすず細工を展示している。



写真1 はかり博物館収蔵品
宮沢功氏製作の手提げ籠



写真2(同右 拡大図)
繊細な模様

展示されている種類としては、弁当行李、手提げ型弁当行李、手文庫、行李、さげかご、手提げカバン、足付きザルなどがある。また、「すずたけ製手提籠」(図1:昭和26年度中信美術工芸展に宮沢功氏(後述)が出品したもの)が展示されている。



写真3
はかり博物館収蔵品



写真4
はかり博物館収蔵品

2)松本市立博物館

博物館の竹内係長によるとみすず細工についての資料などは特別に収集しているわけではないとのことで、収蔵品がどのような経緯で収蔵されるようになったのか、あまりはっきりしていない。作者・製作年の記録がないものが多い。

収蔵品として保管されているソバザル、舟形生花用(花器)、五合ザル、一升ザル、くず入れ、大きい文庫、岡持ち、角半行李を閲覧した。



写真5 岡持ち



写真6 くず入れ

3) 松本民芸館

各種民芸品について収集・展示している博物館である。その中に松本市のみすず細工と岩手県(鳥越)の竹細工も収蔵している。手提げ、小行李、煙草入れ、岡持ち等が展示されている。

民芸館館長に、松本市のみすず細工と鳥越の竹細工の比較について教示を得た。岩手では(ヒゴの)一本取り、二本取り、三本取りなど多彩な編み方があるが、松本では二本取りか三本取りしかない。鳥越から技術が伝えられたとされている松本の竹細工であるが、底面の編み方をみると、両者の違いが分かる。また両者の折衷的な編み方をされた行李(次図参照)をみると、技術交流は一度ではなく何度も行われていたことが推測される。

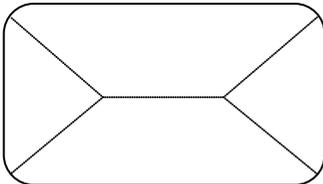


図1 松本の竹細工の底面の編み方



写真7
松本民芸館に収蔵されている岩手県鳥越産の竹行李
一本取りでありながら松本方式の底面の編み方で編まれている

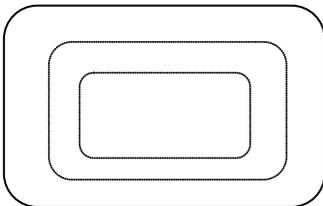


図2 岩手(鳥越)の竹細工の底面の編み方

4)旧開智学校

日本最古の小学校の一つとして有名な開智学校は、国の重要文化財にも指定されている偽洋風建築であるが、建物内部には、みすず細工による敷物が敷き詰められた部屋が存在する。

かなり広い面積にわたって敷き詰められているが、一見して継ぎ目が見当たらず、歪みもない非常に精巧な作りである。建造と同時に敷かれたと考えられる。



写真8 2階広間



写真9

畳ではなくみすず細工が敷き詰められている



写真10

「明治天皇御座所」として保存されている部屋



写真11

みすず細工の敷物(拡大図)

2. 宮沢功氏宅訪問と聞き取り

宮沢功氏はみすず細工の仲買を手広く行っていた方であり、自ら製作もしていた。前述の中信美術工芸展に出品された手提げ籠の製作者でもある。

1) 上質の製品を作るには



写真12 宮沢功氏とみすず細工



写真13 宮沢氏の制作 ビク



写真14 宮沢氏の制作 かご



写真15 製作者不詳 乱れかご
(63×43×12センチ)

乱れかごを例にとると、斜めに編んでいるため、ヒゴの長さは最も短いところで40cm、最も長いところで1mあまりもある。ヒゴの幅は2mmである。二本取りで編まれているが、上質な製品を作るためには、ヒゴを二本で組みあわせて使うとき、根の方と先端の方を「ぶちがい(互い違い)に組み合わせる」。これによって幅によってずれが生じないし、「幅もさることながら、力関係も(うまくいく)」という。根元の方が強く先端が柔らかいという材質の違いも補い合える。

ヒゴを作る時、幅を一定にするためには竹の太い部分で幅を決める。その幅に満たない細い部分は切り落とす。「それをもったいないという発想でいくと良いものはできない」のだと宮沢氏は語る。

現在、職人が途絶えていることもあるが、復興のためには原料であるタケの調達も難点である。「みすず竹は全体としては密生して生えているが、その

中でも一年ものはまばらだった。採る時は六貫目ぐらい（22～23kg）の束にして運んだ。採るのは大人の男の仕事である「子どもが採りに行くなどということは考えられない」という。最盛期には、原料はかなり遠いところから松本に運ばれてきたものもあるという¹。

「良い竹の条件は先端と根っこで極端に太さが変わらず、節間が長く、肉が薄いものだ」という。スズタケは「頭と根っこの太さがそれほど変わらない」という特徴を持つ。「山で竹を切るときに、これはいいなと思うのを伐る。節があるとどうしてもそこで曲がってしまう」からである。「原生林の中にスクスクと伸びたやつが一番いい」のだそうだ。「日向で大きくなったのは、根っこが太くてよくない。肉が厚いと捨てるところが多くなる」「薄いほうがコクが出る（捨てるところが少ないという意味）」。「タケの細さ自体は細いほうがいい」ということは穴が大きいということの意味する。

多く採っていた時は「山の中から、ほんとうに限られたところでだけ、決まった斜面でだけ良い竹が採れたのだ」という。「こういうもの（乱れかごのような上質の製品）を作ろうと思ったら材料から吟味しないとできないので、選んで取っておいたものだ」そうだ。「これほど上質の製品を作ろうと思う人はそれほど多くなかったため、上質の材料もそれほど多くなくても済んだが、作ろうとする人は材料から見た」というのが、仲買人として多くの製作者と接していた宮沢氏の言葉である。



写真16
デザインが工夫された手提げ



写真17
長野の「とうじそば」に用いられる「とうじ籠」

2)大量生産と器械

大量に作るようになると、包丁ではなく器械でつくろうというように改良

されていった。「器械は手仕事に比べると欠点もあるが、市場の要請がある時は量的に間に合うように作った方がいいので、竹を割るにしても肉を剥ぐにしても器械を使った」。しかし、「作る者は最初から器械でやるのではなく、最初は手でやってみるべきだ」と宮沢氏は語る。それでどれだけ難しいのかということが分かるからである。「理屈では分からない」。

松本では、現在、器械はあまり残っていない。宮沢氏が所有しているものを見学した。器械は使いやすいように宮沢氏が改良を施して使っているという。



写真18 スズタケを割るための器械



写真19 4つ割になったスズタケ



写真20 内側の肉を削ぐための器械



写真21 作業の様子

3. まとめ

松本のみならず細工は、細工の精巧さが追求され、用途が多様であることが特徴であるといえる。生活の中で日常的に使われる製品として広く一般家庭に普及していたと同時に、工芸品の域に達している装飾小物、花器、開智学校の長大な敷物など、製造者が様々な作品に挑んでおり、それらは博物館に

も多数保存されている。地域内のみならず、地域外・海外からの需要もあり、需要に応えるために材料作りの段階で器械を導入して大量生産をはかるなど、量産化に対応する方向性も見られた。

多摩のめかいと比較すると、松本のみすず細工は原料となるスズタケが産地の近くにはほとんどなく、遠隔地からも運ばれたこと、採集も多大な労力を要したという証言があったことが大きな違いといえる。多摩地域のめかいは、最盛期には原料不足があったとされているが、基本的には身近な里山に存在するアズマネザサを用い、購入する場合も隣接地域が供給源であった。子どもがシノダケを伐りに行く、という証言もあった²。

このように原料の調達の困難さがあっても製造が続けられていたことは、逆に松本のみすず細工の産業基盤の強固さを示していると考えられる。しかし、職業としての製品づくりではなく、市民が自分の趣味として気軽に続けようとした場合には、原料の調達の難しさは大きな障害となっていく可能性が高いと推測される。

職業としてのみすず細工を生産する最後の製作者が死去されたことから、市は緊急雇用対策事業の一環として予算を組み、復興を試みている³。

市民の立場からのみすず細工の復活に向けた調査研究⁴を行っている動きもある。今後の復興に向けての動きが注目される。

謝辞

小林ちえみ氏には、情報提供、調査のコーディネイト等、多大なご協力をいただいた。特に記して感謝したい。

注

- 1 「松本周辺のスズタケを使用していましたが材料が足りなくなり、秩父連山三国付近、木曽、下伊那～愛知県、富士山麓の御殿場口、本栖湖、河口湖などからも現地の人にお願ひして調達しました。山から刈り出すには、まず道を作り、刈り取ったものを背負って運び出し、それを馬車に乗せ変えました。松本駅の荷物の中でかなりの量のスズタケが貨車から降ろされ取り扱われた時もありまし

た」。小林ちえみ『みすず細工～宮沢さんのお話』

<http://youkoso.city.matsumoto.nagano.jp/citizensweblog/?p=4208> (2012年12月18日閲覧)

- 2 伊野澄氏の聞き取り。一方で、「良質の篠は山深いところに生えているので、荷車やりヤカーの入るところまで担ぎ出すのが大変であった」(多摩市史編集委員会1996a p.27)という証言もある。しかし、足を踏み入れることが困難なほど深い山ではなく、原料の調達先も八王子や鶴川(町田市)など近隣地域であった。
- 3 「みすず細工」http://blog.livedoor.jp/misuzu_319/(2012年12月18日閲覧)
「松本の伝統竹細工「みすず細工」、復活プロジェクトが取り組み披露」2012年3月5日、松本経済新聞。 <http://matsumoto.keizai.biz/headline/1105/>
- 4 小林氏の調査研究は以下のサイトにまとめられている。
「松本の伝統工芸みすず細工」
<http://youkoso.city.matsumoto.nagano.jp/citizensweblog/?p=4176> (2012年12月18日閲覧)
「御殿場へ伝えられたみすず細工」
<http://youkoso.city.matsumoto.nagano.jp/citizensweblog/?p=12733> (2012年12月18日閲覧)
「みすず細工のあった風景」
<http://youkoso.city.matsumoto.nagano.jp/citizensweblog/?p=9258> (2012年12月18日閲覧)
「みすず細工～宮沢さんのお話」
<http://youkoso.city.matsumoto.nagano.jp/citizensweblog/?p=4208> (2012年12月18日閲覧)
「使われ続けるみすず細工」
<http://youkoso.city.matsumoto.nagano.jp/citizensweblog/?p=12348> (2012年12月18日閲覧)
「使われ続けるみすず細工2」
<http://youkoso.city.matsumoto.nagano.jp/citizensweblog/?p=12702> (2012年12月18日閲覧)
「松本のお店」
<http://youkoso.city.matsumoto.nagano.jp/citizensweblog/?cat=32> (2012年12月18日閲覧)

「100年前に書かれたみすず細工」

<http://youkoso.city.matsumoto.nagano.jp/citizensweblog/?p=12667> (2012年12月18日閲覧)

2011年度活動記録一覧

年月日	場所	活動内容		参加者
2011年 4月28日	恵泉女学園大学	聞き取り	菊池富士江氏に対する聞き取り	荒又美陽
2011年 4月30日	パルテノン多摩 (多摩市)	見学	「多摩商店ことはじめ展：商店の歴史と多摩ニュータウン」見学	篠田真理子
2011年 6月19日	恵泉女学園大学	会議	2011年度活動計画について	篠田、谷本、 荒又、漆畑、 宮内
2011年 8月5日～ 8月6日	長野県松本市	聞き取り	松本の伝統工芸であるみすず細工の歴史や現状の聞き取り	篠田真理子
2012年 2月2日	恵泉女学園大学	対談	国際社会学科4年遠藤由子と谷本寿男の対談	遠藤由子、 谷本寿男
2012年 2月23日	恵泉女学園大学	聞き取り	矢滝三千子氏に対する聞き取り	荒又美陽